

資料

失敗に学ぶ

——より良き日本語レポート・論文の文体とことば遣いのために——

原 口 厚

本資料作成の趣旨

高等教育の目標は単なる知識の集積ではなく、物事を批判的に解釈し、自らの見解を形成することにある。したがって何らかの事実関係や自らの考えを言語化し、筋道立てて書かせることはその根本である。これはまた教養教育、そして中等教育から高等教育への移行を支援する初年次教育の大きな柱でもある。さらにこれは同時に、生活能力育成という観点からのキャリア教育にとっても不可欠である。この点について川嶋太津夫は次のように述べている。

今、求められているキャリア教育は、就職のためでもなく、すぐに仕事ができるための就業（即戦力）のための教育でもなく、まさに「社会的・職業的に自立するために必要な基盤となる能力や態度を育成し、一人一人の発達を促す」ようなキャリア教育である（中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会第二次審議経過報告）。つまり、社会人として、職業人として生涯自律して就業することを可能とするような基礎的、基盤的な能力を育成する教育であり、いわば「持続可能な就業力 Sustainable

Employability」の育成である。(川嶋, p. 17)

川嶋はさらに次のように指摘している。

我が国では、新しい教育課題に直面すると（初年次教育やキャリア教育など）、新しい科目を開講したり、新しい組織を開設したり、また、新たな人材を外部から招へいしたりするなど、「付加」的に対応しようとする傾向が強い。しかし、本来は、きちんと教育課程に「埋め込む Embedded」形で、取り組むことが望ましい。(川嶋, p. 17)

これらのことを考えるならば、書くことの指導は単なる〈教養科目〉や新入学者を対象とした追加的技術指導にとどまるものであってはならない。これは大学教育全体が、さまざまな場面において正面から取り組むべき課題である。

その一方で近年よく耳にするのは、大学生の文章力の低下を嘆く声である。しかし日本では一般に、中等教育の場は受験対策として瞬間最大風速的得点能力の形成に忙殺され、文章指導にまで手が回りかねる状況にある。大学入学後も学生がレポートや論文（以下〈レポート〉と略）の書き方について具体的な指導を受ける機会は一般に少ない。その結果が〈難関大学〉の学生といえども〈高偏差値・低学力〉という皮肉な現象である。清水義範の小説『国語入試問題必勝法』（講談社、1987, pp. 31-58）に描かれる主人公の姿はもはやパロディーではない⁽¹⁾。その背景にはコンピュータや携帯電話、メールの普及によって読書習慣が衰え、模範となる文章に触れる機会が減少したことがあるものと思われる。またこれにともなって、話しことばと書きことばの境界が曖昧化したことも一因として挙げられよう。したがって学生にしてみれば、〈今まで教えられもしなかったのに、文章がひどいと急に言われても困る〉というのが正直なところであろう。そこで教員にとって必要なのは、学生の文章力の低

下を嘆き、非難するばかりではなく、向上に向けて実効性のある指導を行うことである。

筆者はこれらの事情を勘案して、早稲田大学商学部のドイツ語Ⅲ（「ドイツ語読解法A・B」）と総合教育科目演習（「〈異文化〉について考える」）でレポートを課している⁽²⁾。それに際しては、自ら作成した資料を用い、引用のしかた、意見や主張には根拠づけを行うこと、話しことば的文体は不可であるといった事前指導を行ってきた。しかし提出されたレポートを読む限り、これは残念ながらあまり成功していない。とりわけ気になるのは、レポート作成の要である日本語の文体とことば遣いについてである。僅かに40編ほどのレポートを読む中で、本稿に引用したに数倍するおかしな日本語に次々と遭遇した。その理由は、書くという経験が少ない学生にとって、一般的、抽象的な注意のみでは、実際にどのような文体やことば遣いが不適切であるかが理解しにくいからであると考えられる。〈話しことばは不可〉と言われても、彼らには話しことばと書きことばの区別は必ずしも容易ではないようである。その結果、さすがに〈ぶっちゃけ言うと〉が不適切であろうという程度の判断はできても、〈どんどん減少する〉、〈～みたいに～〉、〈でも～〉といったことば遣いが随所に出現することとなる。また〈表現は簡潔に〉と言われても、自分の書いたものがはたしてどうなのか判然としないものと思われる。

こうした問題に対して考えられるのは、学生が自ら書いたレポートの文章のどこがどのように不適切であるかについて個別に具体的指摘を行い、問題の所在に気付かせることである。しかしこのような添削指導の第一の問題点は、作業に多大な時間と労力を要することである。A4×3枚程度のレポートでも、場合によっては2時間以上を要することも少なくない。また多くの学生に共通する問題点が、ある学生の今回のレポートについては見られなかったとしても、別の機会に誤りを犯すことも考えられる。前者については教員の職務として精励するとしても、後者については、個別に添削を行って返却するのみでは

不十分である。これに対する一つの方策として考えられるのが、事例を教材として提示することによって、学生間で個々の添削内容の共有化を図ることである。これによって事前指導はより実感を伴って理解されるであろう。このことはまた、学生の自律的勉学を促し、提出されるレポートが内容的に向上することによって、添削作業に要する時間と労力の節減も可能となる。

このような理由から、筆者は実際の添削事例に基づくA4×4枚の資料を作成して授業で使用している。今回掲載するのは、これをもとに、授業時の解説や説教、自らの体験、さらに近年街頭で見かけることの多い〈ヘンな日本語〉なども加えて学生の独習用に試作した〈日本語レポートの文体とことば遣いのための手引き〉である。これらは筆者なりの〈書くことを授業に埋め込む〉ささやかな試みである。

日本語教員でもなく、日本語学を専門とするわけでもない筆者があえて今回の挙に出たのは、深刻な事態に対して、及ばずながら今すぐ何らかの具体的な行動が必要であると感じたからである。したがって本手引きはあくまでも応急処置の試みにすぎない。単なるレポートの書き方といった問題を超えて、初等、中等教育も含めて、日本人に対する根本的な日本語教育の場が必要である。

応急処置とはいえ、それにはそれにふさわしい内容が不可欠である。誤りの指摘をはじめ、改善の提案など忌憚のない意見をぜひ賜りたい。

手直しにあたっては、なるべく原文を尊重したつもりである。しかし文体やことば遣いが適切か否かの判断は、読み手の語感や好みに負うところも少なくない。今回の作業はおおよそ2010年後半の筆者の語感に基づいている。

本資料の作成にあたって、何人かの同僚、知人、学生から貴重な指摘や助言、協力をいただいた。この場を借りて、深く感謝の意を表したい。

- 註(1) 主人公の受験生は国語が不得意である。そこで家庭教師に指導を依頼する。この家庭教師は、本文を読まずとも選択肢の内容から正解を判断するといった受験技法を伝授する。その結果受験生の得点能力は向上し、志望する大学に合格する。彼は感謝の念を伝えるべく、家庭教師に礼状を書く。しかしその文章は日本語の体をなしていない。
- (2) 演習はともかく、外国語科目、それも〈読解法〉で日本語によるレポートを課すことは奇異に映るかとも思われる。しかしことばの使用は受信と発信がより合わされた相互的・総合的営為である。こうした観点から考えるならば、ドイツ語の読解法指導も、ただ読めるようにして終了というものではなく、読んだ内容に対して各自が何らかの見解を言語化して発信するところまで授業で扱う必要がある。この授業の理論的背景と基本的考え方、具体的内容などについては下記を参照されたい。

原口厚. (2002). 読解能力の育成に資する教材の選択と配列について —特定領域集中型読解法によるドイツ語読解教育—. 早稲田商学同攻会, 文化論集, 第20号, 1-61.

引用文献

- 川嶋太津夫. (2010). 今求められるキャリア教育の背景とその在り方. 大学教育学会. 2010年度 課題研究集会 要旨集, 16-17.

手引き

失敗に学ぶ

——より良き日本語レポート・論文の文体とことば遣いのために——

2011年3月

早稲田大学商学部

原 口 厚

目次

0. はじめに	130
0.1. レポートと論文	130
0.2. 事例	131
0.3. 本手引きの使い方	131
1. 心構えと視座	132
1.1. 話しことばと書きことば	132
1.2. 料簡違い	134
1.3. 〈過剰に丁寧〉なもの云い	135
1.4. 〈私は〜〉は避ける	138
2. 主な原因と対策	140
2.1. 一文が長すぎる	140
2.2. 文のねじれに注意	141
2.3. 〈舌たらず〉に注意	144
2.4. 〈が〉の使用は控える	145
2.5. 〈の〉に注意	146
2.6. 回りくどい表現は簡潔に	147
2.7. 〈です・ます〉・〈だ〉体は不可	148
2.8. 〈体言止め〉は不可	148
2.9. 〈推量の文末表現〉は必要最小限に	149

2. 10.	ことばの誤用に注意	149
2. 11.	〈話しことば〉は不可	150
2. 12.	修飾語と被修飾語は近づける	152
2. 13.	同語の反復は避ける	153
2. 14.	ことばの重複に注意	154
2. 15.	漢字の濫用は避ける	154
2. 16.	人名に敬称は不要	155
3.	複合的原因による事例の手直し	155
3. 1.	文のねじれ + 同語の反復	155
3. 2.	文のねじれ + 〈私は〜〉 + 〈です・ます〉体	156
3. 3.	一文が長すぎる + 文のねじれ + 舌たらず + 回りくどい表現	157
3. 4.	〈が〉の濫用 + 一文が長すぎる + 話しことば + 〈です・ます〉体の混在	158
3. 5.	〈が〉の濫用 + 同語の反復 + 一文が長すぎる + 回りくどい表現 + ことばの誤用 + カタカナ語の濫用 + 〈の〉の濫用 + 漢字の濫用	158
4.	良い日本語を書くために	160
4. 1.	言語習得の王道は模倣である	160
4. 2.	〈要約〉は〈読む〉から〈書く〉への転換訓練である	161
4. 3.	目標の二倍書き, 圧縮せよ	162
4. 4.	日本語の読み書きにも辞書を使用せよ	162
4. 5.	提出前に読み直しせよ	163
5.	おわりに	164
6.	参考文献	166
7.	引用文献	168

0. はじめに

提出されたレポートを読むと、〈コピペ〉は論外としても、引用の作法や全体の構成などさまざまな点で問題が目につく。その中で特に気になるのは、レポート作成の要である日本語の文体とことば遣いについてである。諸君の多くにとって生まれた時から慣れ親しみ、運用能力が最も高く、将来にわたって使い続ける〈第一言語〉は日本語であろう。これがまともに書けないということは、大学での勉学のみならず今後の人生にとって由々しき問題である。しかし一方で気がつくのは、多くの不適切な事例も、比較的少数の原因から生じていることである。したがって各自がこれらの問題点を自覚し、注意して書くことによって、事態はかなりの程度改善が可能である。あきらめず努力を続けてほしい。努力し続けさえすれば必ずうまくゆくというほど人生は甘くはない。しかしあきらめた瞬間に一切は〈ゲームセット〉であることもまた確かである。

この手引きは以上のような観点から、レポートにおける〈文体とことば遣い〉に焦点を合わせて作成したものである。提出されたレポートから不適切な事例を集め、これを原因別に分類し、書き直しの提案と解説を付した。添削を受けた当人以外の諸君にも注意すべき点を広く共有してもらいたい。しかしこれはあくまでも〈応急処置〉にすぎない。根本的治療のためには、4.1.でも述べるように、授業以外のところで多くの書物を読むことによって、ことばの蓄積を図ることが不可欠である。本来大学生の勉学は、その多くを教室外で行うものである。これもその一例である。

レポート作成にあたっての他の問題については、数多く出版されている参考書籍などを参照してほしい。巻末の〈参考文献〉にも何冊か挙げておいた。

0.1. レポートと論文

〈レポート (report = 報告)〉とは「『調査や研究の結果わかった事実と、そ

れに基づく自分の意見をまとめた報告書』(学習技術研究会, p. 107)である。したがってそこでは「『事実』とそれに基づいた自分の『意見』だけを書き、また『事実』と『意見』ははっきりと区別して書くことが大切」(学習技術研究会, p. 107)である。一方〈論文〉とはおおよそレポートを量と質の両面にわたって拡大、深化したものと考えればよい。したがって以下に述べることは、基本的にレポートと論文の双方に該当する。しかし学部で学ぶ諸君が書くのは主にレポートであることと、記述の煩雑を避けるために、本手引きでは副題を除いて〈レポート〉に統一した。

0.2. 事例

事例は主に下記の1)～2)から採録した。しかし問題の根本は、大学におけるレポートの書き方以前に、まず日常生活での日本語の使い方であるという点も考慮し、少数ではあるが3)からも採録した。煩雑を避けるために、1)、2)については出所の記載は省略した。

- 1) 早稲田大学商学部2010年度春学期「ドイツ語Ⅲ・ドイツ語読解法A」での課題レポート (「日本は現在の人口の維持ないしは増大を図るべきか、その必要はないか」)
- 2) 同2010年度「総合教育科目演習・〈異文化〉について考える」での課題レポート (「コンビニなどの24時間営業は是か否か」)
- 3) 街頭で見かけた〈ヘンな日本語〉

0.3. 本手引きの使い方

- 1) ★は不適切例であることを示す。
- 2) ☆は原文の手直し案であることを示す。
- 3) ~~~~~ は不適切な箇所を示す。
- 4) ~は語句の省略を示す。

- 5) […] は文の省略を示す。
- 6) /はいくつかの可能な表現を列挙する場合の区切りを示す。
- 7) () は付加的に使用が可能と思われる場合を示す。
- 8) 太字は特に伝えたい箇所を示す。

まず★の例を読み、自分ならどのように書くかをよく考えた上で、☆を見てもらいたい。一つのことについて、さまざまに表現できる場合がある。いろいろな可能性について考えてみてほしい。

~~~~~以外の個所にも手直しを加えた場合がある。★と☆を注意深く読み比べること。

手直しにあたっては、なるべく原文を尊重したつもりである。しかし文体やことば遣いが適切か否かの判断は、読み手の語感や好みに負うところも少なくない。したがって筆者の書き直し案が必ずしも〈正解〉というわけではない。あくまでも一つの可能性であり、提案である。今回の作業はおおよそ2010年後半の筆者の語感に基づいている。誤りの箇所、改善の提案等があればぜひ知らせてほしい。

## 1. 心構えと視座

### 1.1. 話しことばと書きことば

近年はメールの普及などにより、話しことばと書きことばの境界が曖昧化している。しかしレポートは書きことばを用いて書かなければならない。そこでまず最初に、話しことばと書きことばの相違点と、書きことばを書くに際しての留意点について述べておきたい。

## 1) 話しことば

対話は一般的に、話し手と聞き手が対面して展開される。そこで話しことばの使用に際しては、狭義のことば以外にも、両者が共有している情報やその場の状況、あるいは相手の表情、身振り、手振りなどといった言語外の情報もまた多く利用されている。ことばの〈不備〉はこれらによってかなりの程度埋め合わせが可能であることから、省略が多く、話の途中で話題がほかに横すべりするなどして文がねじれたり、完結しないことも多い。このように話しことばは文法的にルーズであるのが一般的である。それでも話は通じ、こうした〈問題点〉もまたあまり気にならない。外国語で話す場合に、単語の羅列やブローケンなことば遣い、身振り手振りなどでもかなりの程度意思の疎通が可能であることを想起されたい。ただしその弱点は、抽象的な問題について深く厳密な話をするのが一般に困難なことである。

## 2) 書きことば

話しことばと比較して、書きことばの場合は、言語外の情報の利用についての制限が大きい。そこで発信や内容理解に際しては、ことば自体に依存する度合いがはるかに高い。特にレポートでは、事の性質上、抽象的な問題についての正確かつ厳密な論述が求められる。したがって、語彙や表現の選択、文法的適合性あるいは文や段落の構成などについて細部にまで及ぶ深い配慮が必要となる。やや誇張して言えば、レポートを書くということは、ことばのみを素材として、自らの考えるところについての言語宇宙を構築することである。

話しことばが時間の経過とともに消えてゆくものに対して、書かれたものは残ることによって、何度も読み直しや検証が可能である。これは書きことばの長所である一方、おかしなことば遣いもまた後々まで残り、恥をさらし続けることとなる。場合によっては、これが何らかの証拠とされ、自ら不利な状況を招くことも覚悟しなければならない。

また友達との気楽な会話などとは異なり、レポートのことばはとりあえず通じればよいというものではない。語彙や表現の選択、語順、読点（、）の打ち方一つにも書き手の意識が反映され、伝達される内容と含意は変わる。まさに〈文は人なり〉である。これらのことを考えるならば、レポートにおいては、ことばをより丁寧かつ慎重に取り扱う態度が必要である。

## 1.2. 料簡違い

★ ずいぶん前から騒がれているこの問題だが、何も改めて考えなくても結論は見えているような気がする。しかしせっかくレポートを書くので、本レポートでは1章で～を、2章で～を述べ、2つを総合して改めて結論を出したい。

☆ 以前から議論されているこの問題をめぐって、本レポートでは1章で～について、2章で～について述べ、2つを総合して改めて結論を出したい。

下線部についてももし本当にそう思っているのなら、大学に来る必要はない。仮に思っていたとしても、これは書くべきことではない。小学生の作文ではないので、自分の気持ちを何でも正直に書けばよいというものではない。高校までの初等・中等教育は子どもを対象としている。これに対して、大学生がどんなに幼稚化しようとも、大学という高等教育機関は本質的に大人を対象とする。学生にはその自覚が求められる。何を書き、何は書いてはならないかの判断もこれに属する。大学は、〈自明〉とされていることをあえて疑って事挙げし、多様な角度から検討を加えることによって真理を追究するところにその本義がある。この点が現状肯定を前提とし、適応を目標とする専門学校などとは決定的に異なるところである。

書くということは、すでに知っていること、分っていることをそのまま記述

することであると一般に思われている。しかし実際に書いてみると、うまく書けないことはしばしば経験するとおりである。これは〈知っている〉・〈分っている〉ことが、実際には〈知っているつもり〉・〈分っているつもり〉であるに過ぎないからである。

筆者も論文を頭の中で構想し、あるいはその内容を誰かに口頭で説明するのは容易で、その時は楽に書ける気がする。しかし実際に書き始めると、この甘い予想は裏切られ、毎回難渋することとなる。これは上で述べたように、〈話しことば〉においては、全体を構成する各部分の關係に不整合や矛盾、齟齬などがあっても、それと認識されることもあまりなく、全体が大雑把なままでも済んでしまうからである。これに対して、書くに際しては、語と語、文と文、段落と段落、そして様々な事實關係や意見、根拠といった各部分が整合しているのか否か、あるいはある前提から当該の結論を引き出すことが妥当かどうかといったことなどが明確に意識にのぼる。書くことが一般に難しいのは、話しことばでは見過ごされてきたこれらの問題点について、一つ一つ考えをめぐらせて克服してゆかなければならないからである。

要は、話す場合とは異なって、書くに際しては細部にわたる厳密な〈詰め〉が求められる。したがって書くことは、さまざまな思考やことばを整理するための〈濾過機〉として機能する。即ち書きおおせることによって始めて、我々は対象を明確に知り、理解することができるのである。書くことに内在するこうした機能を考えるならば、〈何も改めて考えなくても結論は見えているような気がするので書く必要はない〉とは言えないはずである。書くことによって始めて問題が見えてくるのであり、結論にたどりつけるのである。

### 1.3. 〈過剰に丁寧〉なもの云い

★ 今回、ドイツ語のレポートで日本の人口問題、少子化問題について書く機会を頂いた。

☆ 今回のレポートの課題は、日本の人口問題、少子化問題についてである。

下線部は、〈(好意によって)書く機会を与えてもらった〉場合に用いる表現である。レポートは、書かせてもらうのではなく、課されるものである。この表現はまずこの点で不適切である。

★ ~のデータを内閣府統計局から引用させて頂きました。

☆ 下記は~についての内閣府統計局のデータである。

最近のことば遣いで気になることの一つは、〈~させていただく〉をはじめとした〈過剰に丁寧〉な表現の氾濫である。しかしレポートでは〈~させていただく〉は絶対に不可である。引用の許可など求める必要はない。必要だと思ふのなら、堂々と引用すればよい。レポートで最も重要なのは、事実関係や自らの考え、意見などができる限り直截に読み手に伝わるように記述することである。これこそが読み手に対する何よりの〈サービス〉であり、相手におもねるような(バカ)丁寧さは不要である。ことばの〈バカ丁寧化〉や今日の敬語使用をめぐる問題については、参考文献の野口恵子を参照してほしい。

野口は〈相手に対するサービス〉ということについて〈お礼の文章〉を例として次のように述べている。レポートの文体やことば遣いからは少し外れるが、他者に対する心遣いという点で根本的な問題が提起されている。

自分のアドバイスや回答が相手の役に立ったかどうか、書いたほうは不安に思っているものだ。安心を与えるためにも、お礼の文章は、抽象的な

敬意表現を並べるだけですまないで、中身に言及する。どこがどう参考になったか、具体的に述べる。そうすることが、紋切り型のお礼の言葉をはるかに上回る謝辞になる。(野口, p. 40, 太字筆者)

90年代以降、日本では見た目重視の風潮が強い(米澤, p. 139)。ことばの〈バカ丁寧化〉も、上辺だけしか問題にしようとしなない心性の一つの表れとしてその文脈に置いて考えると興味深いものがある。もとより誠意は取り繕うべきものではない。中身に言及するためには、受け取ったアドバイスや回答を時間と労力をかけて熟読し、意味するところをよく考えなければならない。口先だけではなく、体を使ってこれを行うことこそが敬意と感謝の表現である。

更に脱線するが、旧海軍の連合艦隊で参謀を務めた千早正隆は、戦争も末期になるにしたがって、作戦命令などに「勇ましい美文調の語句」(千早, p. 200)が多くなったことを指摘している。

戦争の中盤以降になって戦局が不利になると、その傾向(美文化)は一層増幅した。その結果として、命令として必須の要件である「簡潔にして明確」が、押しやられるという弊をもたらしたことは、否み難かった。また、往々にして作戦目的、攻撃目標が明示されていないことも少なくなかった。(千早, pp. 200-201, 括弧内筆者)

これも一種のことばの〈バカ丁寧化〉である。これは作戦命令という〈サービス〉本来の使命からの逸脱であり、作文の自己目的化である。上の野口の意見と併せて、真のサービスとは何かについてよく考えてほしい。

作戦命令の美文化の背後にあるのは、誰よりも自己を抑制し、虚飾を排した冷徹な洞察と計算、そして実際の行動が求められる軍人の自己陶醉と作文官僚

化である。そこで何よりも問題であるのは、美文によってお粗末な作戦計画の実体が糊塗されてしまうことである。これは理よりも美と情緒を至上とする日本の社会と文化に内在する宿痾であり、官僚の作文や政治家の言説など今日の日本にも連続する大きな問題である。具体的には稿を改めて考えを述べたい。

#### 1. 4. 〈私は〜〉は避ける

★ だから私は、出生率を2.1以上に保つべきだと考える。

☆ したがって／以上の観点から、出生率は2.1以上に保つべきである／保たれるべきである／保つ必要がある。

レポートは小学生の〈感想文〉などとは異なる。レポートで何よりも重要なのは、個人的感情を排し、できる限り事実関係や思考に即して、これを筋道立てて記述することである。石原千秋はこの点についての的確に指摘している。

高校までは生活指導があるし、作文教育も高校生の人間教育の一環としてあった。高校の読書感想文は自分の好みをかなり直接的に書いてもいい。だから、高校生の「文体」はアイデンティティー形成と不可分のものとしてある。思春期にはそういうことも必要なのだから、それはそれでいい。／だが、大学でレポートや卒業論文に使う「文体」は、高校までの読書感想文の「文体」ではない。もちろん、自分の好みから出発してもいいが、大学ではそれをいかに論理的に、あるいは実証的に述べるかが勝負なのだ。つまり、はっきり言えば、大学は学生の人生を引き受ける場ではないということだ。[…]／冷たいようだが、大学のレポートでは人間としての君たちを知ろうとは思ってはいない。知りたいのは君たちの思考である。だから、感想文では大学のレポートにはなり得ないのだ。[…]／つ

まり、大学のレポートでは「私は～と思う」という形式の文ではなく、「～は～である」という形式の文が求められる。もちろん、これも厳密には「私は『～は～である』と思う」という文の構造になっているのだが、いま傍線を施した（下線に変更筆者）「私は～と思う」の部分は、大学のレポートでは隠されていて、書かれないのがふつうである。それが「研究」の文体なのである。この文体で書くためには研究としての根拠が示されなければならない。どういうものがまともな根拠であるかは研究ジャンルによって異なる。その手続きを学ぶのが大学である。（石原，pp. 67-68，太字と括弧内筆者）

〈私は～について～だと思ふ〉という表現は、いわば対象を自分と同じ地平に置き、それが自らの目に映る姿について述べているようなものである。これは〈感想〉である。本来〈報告〉を意味するレポートに求められるのは、自らの視座をいわば上空の偵察機に置き、対象のみならず、これを見ている自らの位相も考慮しつつ状況を観察し、さまざまな兆候や根拠に基づいて〈～は～である（と思ふ／判断する）〉という形で述べることである。

★ 私はそのことが心配でならない。

☆ そのことが（強く）心配される／危惧される／懸念される／（深く）憂慮される。

★ そこで私が提案したいキーワードは『田舎』である。

☆ そこでキーワードとなるのが「田舎」である。

★ そこで政府は外国人看護師や介護士などの受け入れを検討している。[…]  
しかし私は根本的な解決になっておらず、その場しのぎの方策にすぎないと考える。

☆ a そこで政府は外国人看護師や介護士などの受け入れを検討している。  
[…] しかしこれは問題の根本的な解決になっておらず、その場しのぎの方策にすぎない。

〈その場しのぎの方策にすぎない〉とは〈(私は) その場しのぎの方策にすぎない (と考える／判断する)〉ということである。この点について小笠原喜康は、『『考えたこと』を書くのが論文なのであるから、『～と考える』を入れるのは余分である』(小笠原, p. 207, 太字筆者)と述べている。

しかし何らかの理由から〈私は〉が必要となる場合には、〈筆者は〉を使用する。

☆ b したがって／以上の観点から、筆者は出生率を2.1以上に保つべきだ／保つ必要があるという立場をとる。

## 2. 主な原因と対策

### 2.1. 一文が長すぎる

★ 以上のことを考えると24時間営業は決して原因とは言えず、テレビ・ラジオ・パソコン・携帯電話などの普及や、グローバル化による海外とのかかわり、フレックスタイム制度を取り入れた企業の増加など様々な要因によって、睡眠時間が減り、人々のライフスタイルが変わった結果であり、

24時間営業が深夜型ライフスタイルを助長しているとは言えないのではな  
いか。

- ☆ 以上のことを考えると、24時間営業は決して深夜型ライフスタイルの原因ではない。テレビ・ラジオ・パソコン・携帯電話などの普及や、グローバル化による海外とのかかわり、フレックスタイム制度を取り入れた企業の増加などがその要因である。要は人々の睡眠時間が減り、暮らしかたが変わったのである。したがって24時間営業が深夜型生活を助長しているとはいえない。

一文が五行とは長すぎる。かつて筆者もこのような文章を書いていた。大学院の指導教授に「源氏物語のようだ」と評されたことを懐かしくかつ恥ずかしく思い出す。それぞれが主張を有する部分をいくつも抱え込むことによって文は長くなる。例えて言えば、巨大な〈多民族国家〉のようなものである。これらを全体として調和させ、統治するのは一般に困難である。これに失敗すると、各部分の〈分離独立運動〉が発生し、次に述べる〈文のねじれ〉という大問題を生むことになる。これに対しては、〈一文には一つの主張〉を原則としてそれぞれを独立させ、その組み合わせを考える。一文は二行までをめどとする。

## 2.2. 文のねじれに注意

### ★ 1) カレーソースが変更します

(某カレー店の店頭掲示 2010年10月18日採録)

- ☆ 1) a (当店は) カレーソースを変更します

この例の問題点は、主語と述語の不整合による〈文のねじれ〉である。〈変

更する)は、本来〈～は／が～を変更する〉という形で使用される。したがって〈変更する〉を用いるのであれば、☆1) aのようにしなければならない。こうした場合、日本語では主語は一般に明示されないので、〈当店は〉は省く。なお〈カレーソース〉は店独自の表現として、適否は問題としない。

〈カレーソースが〉を生かしたいのであれば、述語を〈変わる〉にする。

☆ 1) b カレーソースが変わります

〈変更する〉が漢語であることと、英語の〈S + V + O〉構文のような〈～が～を～する〉という文型のせいから、☆1) aの表現は硬く、公告文のようである。これに対して、☆1) bは響きが柔らかく、表現としても自然である。店頭のお知らせとしては、むしろこちらの方がふさわしいであろう。

掲示では〈カレーソースが変更します〉と大書された下に、小さな文字で「平成22年4月1日より販売しておりましたカニクリームコロッケカレーのカレーソースが10月4日からポークソースに変更になりますのでお知らせします」と延々と書かれている。お知らせ=広告という見地からは、情報上重要な〈10月4日から〉をこの文に加えた方が訴求力が強まる。

☆ 1) c 10月4日からカレーソースが変わります

筆者が店の担当者であれば、10月4日には〈10月4日から〉を〈今日から〉にし、10月5日以降は〈変わります〉を〈変わりました〉に書き改める。

☆ 1) d カレーソースが変わりました

こうしたことばの分りやすさと伝達効果の関係などについては、参考文献の藤沢晃治を参照されたい。

★ 2) ここにも大きな問題をはらんでいる。

☆ 2) a これは／このことは大きな問題をはらんでいる。

☆ 2) b ここにも大きな問題がひそんでいる。

★2) についても問題は同じである。〈はらんでいる〉は〈～は／が～をはらんでいる〉という形で用いられる。したがって☆2) aのように、〈ここにも〉を〈これは〉ないしは〈このことは〉などに変えて整合を図らなければならない。〈ここにも〉を生かしたいのであれば、☆2) bのように、述語を〈ひそんでいる〉などに変える必要がある。

★ 3) 消費者の減少は日本経済の活力を失うことになる。

☆ 3) a 消費者の減少は日本経済の活力を失わせる／喪失させることになる。

★3) の場合、〈消費者の減少は〉で始めるのであれば、〈失わせる／喪失させる〉で終わらなければならない。〈失うことになる〉を生かしたいのであれば、全体を次のように変える必要があろう。

☆ 3) b 消費者の減少によって、日本経済は活力を失う／喪失することになる。

それぞれのことばには特定の助詞などとセットになった決まった言い回しや呼応関係がある。これを明確に意識しないまま、ことばを適当に組み合わせて用いると、それぞれが互いに影響する中でねじれが生まれる。文のねじれは、2.10.で述べる〈ことばの誤用〉と共に、書くことにおいて最も罪が重い。文のねじれは認識の不備であり、文の骨格をなす論理関係のゆがみである。この点については、主語・述語関係を中心として十分に推敲されたい。

### 2.3. 〈舌たらず〉に注意

★ 阪神淡路大震災の時には多数に帰宅難民がコンビニに詰め寄り、食料や懐中電灯などを提供し貢献したという事例もある。

☆ a 阪神淡路大震災の時には、多数の帰宅難民がコンビニに詰めかけた。これに対して、コンビニは食料や懐中電灯などを提供し、貢献したという事例もある。

☆ b 阪神淡路大震災の時には、多数の帰宅難民がコンビニに詰めかけ、これに対して食料や懐中電灯などを提供し、貢献したという事例もある。

☆ c 阪神淡路大震災の時には、詰めかけた多数の帰宅難民に対して、コンビニは食料や懐中電灯などを提供し、貢献したという事例もある。

原文の最大の問題点は〈～を提供し、貢献した〉のが帰宅難民であるように読めることである。その一因もまた、一文に〈帰宅難民が詰めかけた〉と〈コンビニが～を提供し、貢献した〉という二つの主張を詰め込んだことである。この文は長すぎるわけではない。むしろ逆に、〈提供し、貢献した〉のがコン

コンビニであるという点について舌たらずであることによって、事実とは逆の解釈を誘発している。

そこでまず、それぞれ〈誰が何をしたのか〉の明確化を図る。その一つの方法は、☆aのように二文に分けることである。しかしこの場合、〈コンビニ〉という同語が反復することとなる。これを回避するために考えられるのが☆bである。しかしこの場合〈提供し、貢献した〉のがコンビニであることが明確を欠く。この点に配慮したのが☆cであるが、今度はどこに詰めかけたのが今一つははっきりしない。しかし両者を比較すると、文中に隠れている〈コンビニ〉についての推測の容易さと安定性、そして日本語としての自然さという点で、☆cのほうがよいであろう。

なお〈多数に詰め寄り〉の〈に〉と〈詰め寄り〉の使い方は日本語としておかしい。これは2.10.で扱う〈ことばの誤用〉である。

〈詰め寄り〉は、新明解国語辞典によれば、「㊦相手を斬（キ）るために、そば近くまで行く。㊧相手からの誠意ある返答を求めて、半ば脅迫的な態度をとる」を意味する。このように詰め寄る対象は人間であって、コンビニのようなモノではない。〈コンビニ〉によって〈コンビニ側〉、〈コンビニ従業員〉が含意されているとも解釈されるが、その後のコンビニ側の好意的対応などを考えると、〈詰めかけ〉ないしは〈押し寄せ〉などが妥当であろう。そこで手直し案のように〈多数の帰宅難民が～詰めかけ〉とするか、〈帰宅難民が～多数詰めかけ〉とする。

#### 2.4. 〈が〉の使用は控える

★ 少子化の問題であるが、日本の合計特殊出生率は第一次ベビーブーム時には4.3を超えていたが、第二次ベビーブーム時には2.1にまで下がっている。

- ☆ 少子化の問題にとって重要なのが「合計特殊出生率」である。日本ではこれが第一次ベビーブーム時に4.3を超えていたのに対して、第二次ベビーブーム時には2.1にまで下がっている。

〈が〉を「㊦(接助)㊧前置きや補足的な説明を、あとの叙述に結びつけることを表わす」(新明解国語辞典)ために使用する場合はしばしば見られる。原文では最初の〈が〉がこれに該当する。しかしこうした〈が〉の使用は文を徒(いたずら)に長くし、文のねじれを誘発する一因となる。したがってこのような用法での使用は控え、短く簡潔な文で全体を構成するよう心がける。

一方〈が〉には、原文の二番目の場合のように、〈逆接〉としての用法もある。しかし逆接の〈が〉は、強さという点で、一般に〈しかし〉、〈これに対して〉などには及ばない。そこで〈が〉は、このような特性を生かして、原則として弱い逆接に限定して使用する。ただし、この場合も二つの主張を一文に収めることになるので、文が長くなることがある。その点に十分注意する。

## 2.5. 〈の〉に注意

### ★ 将来の日本人の人口の減少

#### ☆ 将来の日本の人口減少

〈人口の減少〉から〈の〉を省いた〈人口減少〉は、内容的には同じでありながら、引き締まった表現となる。また〈日本人の人口減少〉は2.14.で扱う〈ことばの重複〉である。〈日本人の〉は〈日本の〉とする。

2.4.で扱った〈が〉とも似て、〈の〉は便利なのでつい繰り返し使用しがちである。しかし何度も繰り返すと、単調かつ冗長になる。そこで〈の〉の連続使用は二回までとし、そのほかの表現で簡潔化と文体上の変化を図る。どのよ

うな表現にするかは前後の文との調和なども考慮する。

- ★ 介護などの公的サービスの水準の維持も難しくなる。
- ☆ a 介護など公的サービスの水準維持も難しくなる。
- ☆ b 介護などの公的サービスの水準維持も難しくなる。
- ☆ c 介護などの公的サービスの水準を維持することも難しくなる。
  
- ★ 諸般の事情で、学生の評価が難しい。(本例は筆者が作成)

〈学生の評価〉には二つの解釈が可能である。まず第一に〈学生が(授業、教員などを)評価する〉ことが考えられる。一方これとは逆に、〈(教員などが)学生を評価する〉とも解釈される。そこで前後関係も含めて検討し、紛らわしい場合は〈の〉は避け、どちらの意味であるかが明確な表現にする。

- ☆ a 諸般の事情で、学生が評価すること／学生による評価が難しい。
- ☆ b 諸般の事情で、学生を評価すること／学生に対する評価が難しい。

## 2.6. 回りくどい表現は簡潔に

- ★ 以上より、人口減少は日本全体にとって深刻な問題となってきたのが現状なのである。
- ☆ 以上のことから、人口減少の問題は日本全体にとって深刻化している。

『～となって』『きて』『いる』のが『現状』『なので』『ある』といった表現は回りくどく、分りにくいいうえに文のねじれの誘因ともなる。短く簡潔な表現を心がける。

## 2.7. 〈です・ます〉・〈だ〉体は不可

- ★ この数字はあくまで去年のものですが，08年秋以降の景気低迷で結婚や出産を見送る女性が増えたことが影響しています。
- ☆ この数字はあくまでも昨年のものである。08年秋以降の景気低迷で結婚や出産を見送る女性が増えたことが影響している。
- ★ ～，廃棄物がより多くなるのは明らかだ。
- ☆ ～，廃棄物がより多くなるのは明らかである。

レポートは〈である〉体で書く。〈だ〉体も不可である。このことについて、小笠原は次のように述べている。

「～だ」という文末表現は、「である」体ではないという理由の他に、感情性を帯びた強調表現だからである。論文は、自分の論理を展開すべきであって、感情を表現すべきものではない。(小笠原, p. 207, 太字筆者)

また提出されたレポートでよく目にする文末表現として〈のである〉が挙げられる。しかしこれには強調の意味合いが若干あることから、頻用は避ける。そこで通常は〈である〉を使用し、〈のである〉は「『ここで決めよう』というときのために取っておく」(石原, p. 35) こととする。

## 2.8. 〈体言止め〉は不可

- ★ 総人口は現在の～から2055年には～へと減少の見込み。

☆ 総人口は現在の～から2055年には～へと減少の見込みである。

体言止めは新聞の見出しなどの文体である。これは余計なく余情)や(余韻を生むことから、明確な論述が求められるレポートには使用しない。

## 2. 9. 〈推量的文末表現〉は必要最小限に

★ また、日本がこれから観光立国をめざすにせよ、～にせよ、引き継いでいく人が必要であることは、間違いないはずだ。日本の発展を考えれば、出生率を高く保つことが必要ではないだろうか。

☆ また日本がこれから観光立国をめざすにせよ、～にせよ、後継者が必要であることは間違いない。日本の発展を考えれば、出生率を高く保つことが必要である。

上にも述べたように、レポートは事実関係や自分の考えについての報告である。したがって〈～であろう〉、〈～と思われる〉、〈～なのではないか〉といった推量的なもの云いは必要最小限とする。このことは自分の言に責任をもつことから必要である。

## 2. 10. ことばの誤用に注意

★ 更に、人口の高齢化は退職者を多く産出し、～  
産出：①その会社・工場などで生産すること。〔…〕 ②その土地で取れて売り出されること。(新明解国語辞典)

☆ さらに、人口の高齢化は退職者を多く生み出し、～

- ★ ～，具体的には税収で引かれる額が大きすぎると，社会人の労働意欲に悪影響を及ぼす可能性があります。

税収：税金による国家などの収入。（新明解国語辞典）

- ☆ ～，具体的には税金として徴集される額が過大であると，人々の勤労意欲に悪影響を及ぼす可能性がある。

- ★ 人口減少を食いとどめるためには，～

- ☆ 人口減少を食い止（と）めるためには，～

これはことばの使用の根本にかかわる重大な誤りである。〈4.4. 日本語の読み書きにも辞書を利用せよ〉を参照すること。

## 2. 11. 〈話しことば〉は不可

- ★ どんどん縮小， ☆ ますます／更に／いっそう縮小，

- ★ 面倒を見なければいけなくなる。 ☆ 面倒を見なければならなくなる。

- ★ もったいなさすぎる。 ☆ あまりにも惜しい／残念である。

- ★ そんな多額の費用を～ ☆ それほど多額の費用を～

- ★ ～社会に適応させたほうがいいと～

- ☆ ～社会に適応させたほうがよいと～

- ★ ～解決していくべきなのである。
- ☆ ～解決してゆくべきなのである。
- ★ なので国が～保育園を造り運営するべきだ。
- ☆ そこで／したがって国が～保育園を作り，運営するべきである。
- ★ もうやっているのかもしれないが，
- ☆ すでに行っている／行われている／実施されている可能性があるが，
- ★ 外国人労働者をもっと受け入れるのも手だろう。
- ☆ 外国人労働者を更に／現在以上に受け入れるのも一つの方法であろう。
- ★ もしかしたら仕事をもらえないかもしれない。
- ☆ 場合によっては仕事が得られない／就業できない可能性がある。
- ★ 私はずばり必要ないと回答する。
- ☆ それは明らかに不要である。

ここに引用したのは全体の一部にすぎない。話しことばの混入は恥ずかしい

ことである。いわば衣服は正装であるのに対して、足元はサンダル履きといった姿に例えられる。これは〈幼稚〉、〈稚拙〉といった印象を読み手に与え、〈文のねじれ〉、〈ことばの誤用〉と共に、一言で全体のできばえと信用を大きく損なうことになる。十分な注意が必要である。しかし書きことばと話しことばの境界は原理的には必ずしも明確ではない。そこで各人の語感によって評価が分かれる場合も少なくない。これについては、模範となる良い書きことばを多く読み、語感を磨く日頃の心がけが必要である。

## 2. 12. 修飾語と被修飾語は近づける

★ その人たちがうまく結婚できるようなシステムを作ることが今すぐにも出来る出生率低下に対する対策なのではないかと考えます。

☆ その人たちがうまく結婚できるようなシステムを作ることが、出生率低下に対して今すぐにもできる対策である。

〈今すぐにもできる〉のは〈出生率低下〉ではなく、〈対策〉である。このことが明確に伝わる語順とする。

★ 必ずお席を離れる時は、12番受付に声をお掛けください  
(某病院待合室の貼紙 2010年8月18日採録)

☆ a 席を離れる時は、12番受付に必ず声をおかけください

☆ b 席を離れる時は、必ず12番受付に声をおかけください

まず〈必ずお席を離れる時は〉は意味をなさない。ここで求められているの

は、〈離席を必ず知らせよ〉ということである。したがって〈必ず〉と〈声をお掛けください〉が結合するような語順に配慮する必要がある。

語順の問題からは逸脱するが、筆者の語感では〈お席〉の〈お〉は過剰に丁寧である。述語が〈お掛けください〉となっており、これで十分に丁寧な表現になっている。しかしこの文の丁寧さに関して、「問題は〈お〉の有無ではない。〈必ず〉は押しつけがましく、このことばが丁寧さとは反対の方向に作用している」と日本語教育の専門家から指摘を受けた。同感である。

☆c 席を離れる時は、12番受付に声をおかけください

このこともまた1.3.で触れた丁寧さやサービスの本質にかかわる問題である。丁寧さは敬語だけによって表現されるものではない。

しかし病院の現場では、診察の順番などをめぐって、離席と絡んだ揉め事が少なくないであろう。不注意な患者の存在や、診療を円滑に進めるという実務上の要請などを勘案すれば、筆者は〈必ず〉は必要であるという立場をとる。難しいところである。

## 2. 13. 同語の反復は避ける

★ 1) なぜなら、冷蔵冷凍保存が必要な商品を保存する冷蔵冷凍機器は、最も電力を消費するからである。

☆ 1) なぜなら、(商品の)冷蔵冷凍保存用機器は、最も電力を消費するからである。

〈冷蔵冷凍保存〉と〈保存する冷蔵冷凍機器〉が相前後して出現するのはく

どく冗長である。こうした場合は削除ないしは集約，言い換えが必要である。

★ 2) これから先，高齢者の生活を保障するためにこれまでより多くのお金が必要になってくる。このお金を誰がどう負担するかが問題である。

☆ 2) これから先，高齢者の生活を保障するために，より多くの資金／財源／財政支出が必要になってくる。これを誰がどう負担するかが問題である。

この場合は二文にわたるため，☆1) のように一つに集約することは困難である。そこでそれぞれ異なる語に言い換える必要がある。

#### 2. 14. ことばの重複に注意

- |                   |         |
|-------------------|---------|
| ★ <u>今の現状</u>     | ☆ 現状    |
| ★ <u>日本の人間の人口</u> | ☆ 日本の人口 |
| ★ <u>結婚の晩婚化</u>   | ☆ 晩婚化   |

〈現状〉は今のことであり，〈人口〉には馬や鶏の数は含まれず，〈晩婚化〉は結婚についてだけの事象である。つい見落としがちなので注意を要する。

#### 2. 15. 漢字の濫用は避ける

- |                   |            |
|-------------------|------------|
| ★ <u>～の為に</u>     | ☆ ～のために    |
| ★ <u>～無しに</u>     | ☆ ～なしに     |
| ★ <u>～に因れば</u>    | ☆ ～によれば    |
| ★ <u>極々最近になって</u> | ☆ ごく最近になって |
| ★ 日本に <u>於いて</u>  | ☆ 日本において   |

これは〈誤り〉ともいえない問題である。話しことばと書きことばの区別の問題とも似て、何を漢字で、あるいはひらがなで表記すべきかに明確な一線を引くことは原理的に不可能である。これは習慣と好みの問題である。ただし、近年はこのような場合、ひらがなで表記することが多い。比較的漢字を多用する筆者も、これらについてはひらがなを使用する。

レポートのような〈堅い〉、〈まじめ〉といった印象が強い文章を書く場合、漢字の〈権威性〉に頼りがちになることがある。また近年は難しい漢字でもコンピュータが簡単に変換してくれるので、こうした点からも漢字を濫用しがちである。しかし何を漢字で、何をひらがなで表記するかはコンピュータ任せにすることなく、書き手自らがこれを統御することが必要である。少なくとも当該のレポートの中での混用は避ける。

## 2. 16. 人名に敬称は不要

- ★ 先に紹介した森永氏は、
- ★ ○○先生の論文では、
- ☆ 先に引用した森永は、
- ☆ ○○の論文では、(本例は筆者作成)

人名には〈氏〉や〈先生〉、〈教授〉などの敬称は不要である。

## 3. 複合的原因による事例の手直し

### 3. 1. 文のねじれ + 同語の反復

- ★ 人口維持が不要であるという理由の1つに、日本だけが人口減少するわけではないということである。

☆a 人口維持が不要である理由の1つに／1つとして、日本の人口のみが減少するわけではないことが挙げられる。

☆b 人口維持が不要である理由の1つは、日本の人口のみが減少するわけではないことである。

〈～という理由の1つに〉とくれば、〈～が挙げられる〉で締めくくらなければならない。文末を〈～ことである〉としたいのであれば、〈～である理由の1つは〉を対応させることによって文のねじれを解消する。原文が冗長である原因の一つに〈という〉の反復がある。どちらも削除する。

☆aと☆bを合わせた次のような表現も可能である。

☆c 人口維持が不要である理由の1つに／1つとして挙げられるのは、日本の人口のみが減少するわけではないことである。

### 3.2. 文のねじれ + 〈私は～〉 + 〈です・ます〉体

★ また私は人口と雇用は密接な関係があると考えます。

☆a また筆者は、人口と雇用には密接な関係があると考える。

☆b また人口と雇用には密接な関係がある。

この場合、〈雇用は〉を〈雇用には〉とすることによって文のねじれは簡単に解消する。その際に〈私は〉は、少なくとも〈筆者は〉とする。さらにそこから〈筆者は〉と〈と考える〉を削除し、☆bのようにすることが望ましい。

〈人口と雇用は〉を生かすのであれば、〈関係する〉で終わる。

☆c また人口と雇用は密接に関係する。

### 3.3. 一文が長すぎる + 文のねじれ + 舌たらず + 回りくどい表現

★ 高齢者の割合が増えれば医療費や年金、介護といった問題が深刻化し、負担は下の世代にのしかかることになる。そのことから、雇用不安や将来の期待所得の低下により、さらに結婚・出産に踏み切れるだけの経済的な基盤を得られないでいる人が増えて、負のスパイラルに落ちてゆくという危険な問題も孕んでいる。

☆ 高齢者の割合が増えれば、医療費や年金、介護といった問題が深刻化し、負担は次世代にのしかかることになる。その一方で、雇用不安や将来所得の低下による結婚・出産の減少も予想される。このことも相まって、事態は負のスパイラルに陥る危険もはらんでいる。

見出しに列挙した問題点も影響して、二番目の文は何が言いたいのかははっきりしない。一つの解釈として次のように読める：〈次世代にのしかかる負担は雇用不安や将来所得の低下を生む。このことは、結婚・出産の減少を招き、事態は負のスパイラルに陥るという危険もはらんでいる〉。しかし、雇用不安や将来所得の低下は上の世代からの負担によるものであろうか。その原因は別であると思われる。しかし一方で経済的見通しの暗さが結婚や出産の減少を引き起こすことは十分に予想され、高齢者を支える負担との相乗作用の中で事態は悪化の道をたどると筆者は考える。いずれにせよ文意が明確に伝わるように、問題の全体的図式を整理し、文の骨格を整え、表現の簡潔化を図る。

### 3. 4. 〈が〉の濫用 + 一文が長すぎる + 話しことば + 〈です・ます〉体の混在

★ これがどのくらい深刻な事態なのかはいまいちピンとこないのが非常に残念ではあるが将来的に大変なのだと言うことは少なくとも分かる。特に2055年には私はもう70歳を過ぎており支えられる側になっているのでこの予想データが外れるといいと思いますが現状を見ている限りにおいてそんなに誤差ない数字ではないのではないかと思う。

☆ これがどれほど深刻な事態なのか、残念ながらいまひとつ実感がわかない。しかし少なくとも将来大きな問題となることは理解できる。2055年には筆者も70歳を過ぎ、支えられる側になっている。そこで予測が外れることを祈る。しかし現状を見る限り、数字にさほどの誤差はないと思われる。

この一節は形式の上からは、二つの文から構成されている。しかし第一の文には二つの主張が、第二の文には三つの主張が含まれている。その結果第二の文が長くなりすぎ、読点(,)もないため、全体が冗長で読みにくい。そこでまずこれらの主張の独立を図る。〈いい〉、〈そんなに〉、〈いまいちピンとこない〉は話しことばである。特に〈いまいちピンとこない〉はレポートには全く場違いな俗語的話しことばである。さらに〈です・ます〉体が混在している。それぞれに手直しを施す。

### 3. 5. 〈が〉の濫用 + 同語の反復 + 一文が長すぎる + 回りくどい表現 + ことばの誤用 + カタカナ語の濫用 + 〈の〉の濫用 + 漢字の濫用

★ 市場の区分では、少子高齢化により衰退するところもあれば発展するところもあると考えられる為、その影響を一概に悪とすることは出来ないが、就労者の老齡化が新技術のイノベーションの妨げになる可能性を鑑み

ば、楽観視は出来ないと考えるのが妥当だ。

☆ 各市場は、少子高齢化によって衰退する場合もあれば、逆もありうる。したがってその影響を一概に悪とすることはできない。しかし就労者の高齢化が技術革新の妨げとなる可能性を考慮するならば、楽観もまたできない。

原文では、〈が〉によって二つの文がつなぎ合わされている。そして各文にはそれぞれ二つの主張が含まれている。その結果、三行を超す長文の中で〈理由〉、〈留保〉、〈条件〉、〈判断〉がからみあっている。これに〈楽観視は出来ないと考えるのが妥当だ〉という回りくどい表現も加わり、一読して全体を見通すことが困難である。この場合もまた、まずそれぞれの主張を独立させることが手直しの出発点となる。そのうえで〈ところも〉の反復を解消し、〈楽観視は出来ないと考えるのが妥当だ〉の簡潔化を図る。〈出来ない〉はひらがなで表記する。

原文の〈～を鑑みて〉は、正しくは〈～に鑑みて〉である。さらにこの表現は、本来「過去の実例や現在の一般的事情をよく考え合わせて、自分の判断を決める」（新明解国語辞典）場合に使用する。したがって〈可能性〉ということばによって示唆されているように、将来の事態に言及するこの文に〈～に鑑みて〉はそぐわない。

〈新技術のイノベーション〉の〈の〉は主語と目的語のどちらを表しているのであろうか。一つには〈新技術によるイノベーション（innovation＝革新，更新）〉のことであると読める。他方でこれは〈新技術をイノベート〉することとも考えられる。その場合、〈旧技術を革新する〉ではなく、〈新しい技術を

革新する」というのは不可解である。そこでこの曖昧な〈新技術のイノベーション〉の内容を意味的に明確化し、文体を引き締めるために〈技術革新〉という短い一語に置き換えた。

近年日本では〈イノベーション〉のようなカタカナ語が氾濫している。カタカナ語には、従来の日本語をさらに差異化し、これとは異なる意味合いを表現できるという利点がある。しかしカタカナ語の使用は、往々にして明確な意味内容の表現よりも、〈カッコよさ〉や〈雰囲気〉に傾きがちである。これは上に述べた〈作戦命令などにおける勇ましい美文調の語句の増加〉とも通底する現象であり、足元をすくわれる危険がある。その使用には慎重さが求められる。カタカナ語濫用の問題点については、加藤周一を参照されたい。

## 4. 良い日本語を書くために

### 4.1. 言語習得の王道は模倣である

諸君は生まれて以来、身の回りに空気のように存在する日本語を模倣することによってこれを習得してきている。したがって書く技を身につけるのに何よりも良いのは、書籍や新聞、とりわけ文体やことば遣いの点でレポートと共通点が多い論文や論説、評論などを読むことである。これによって良き書きことばを体に取り込み、〈元手〉を蓄積しないことには何も始まらない。職人は親方や兄弟子の技を盗んで身につける。力士は兄弟子や関取の胸を借りて強くなる。書くことについても同じである。

ことばの受信と蓄積のためには、ブログやネットのサイトなどを読んでもよいように思うかもしれない。しかし書籍や新聞とこれらでは、お手本としての信頼性において大きな隔たりがある。新聞・書籍では編集者などが原稿に目を通し、必要な加筆や書き直しなどを行っている。これに対してブログなどの場

合、一般に他者の目を経ておらず、いわば書きっぱなしである。また話しことば的な文体も少なくない。

筆者はドイツ語で文章を書くとき、ことばの使用が模倣のうえに成り立っていることを痛感する。頭の中に入っている語彙や文法、ことば遣いはすべて教科書やどこかで読んだり聞いたりしたものなどのコピーである。これらの乏しい素材を、類語辞典などを利用してふくらませ、同語の反復回避に気を使いつつ、まずなんとかつながぎあわせる。そのうえで、要所要所にはそこにふさわしそうなうろ覚えの表現を懸命に思い出し、辞書で確認しつつ散りばめるなど、毎回苦心惨憺しながら全体を構成している。まさにコピーの断片をもとにしたコラージュ（貼り合わせ）である。もとより貼り合せ方に個人の独自性が出る。しかし模倣なしにこれは成り立たない。日本語の場合は語彙や表現、文法に少しは余裕があるので、一般にこうしたプロセスはあまり意識されない。しかし基本的に同じことである。

#### 4.2. 〈要約〉は〈読む〉から〈書く〉への転換訓練である

筆者は昔、交通経済関係の新聞記事を毎月何編か150～200字程度に要約する仕事を担当していたことがある。最初はなかなか短くまとまらず、一編仕上げるのにかなり時間と労力を要した。原稿に目を通した上司からしばしば手直しも受けた。

今思い出してみると、この要約作業は、インプットをアウトプットに転換するよい訓練となった。まず記事を読みながら内容の骨子を拾い出さなければならない。これを指定された長さに収めるためには、枝葉を切り落とし、簡潔に書かなければならない。レポートを書くにあたって、まず調べた内容や主張を整理し、核心を手短かにまとめて書く必要がある。要約作業はそのためのよい練習である。

### 4.3. 目標の二倍書き, 圧縮せよ

当時勤め先の先輩から助言されたのは、〈まず目標の二倍書き, これを圧縮せよ〉ということであった。下書きはどうしても散漫になる。それなら長く書けば, すべてを網羅し, 意を尽くせるかといえば, そういうものではない。長いえに散漫なだけである。必要なのは〈濃縮〉である。4.2.と4.3.をまとめると次のようになる。

- 1) 最初に, 調べてわかったこと, 自分の意見, 根拠, 結論などレポートの核心を簡潔に書く。
- 2) これに前提や条件, データ, 実例などを付け加えて形を整え, 目標枚数の二倍とはいわずとも, 長めにひとつおき書きあげる。
- 3) そのうえで, 余計なところを削り, 全体を圧縮して内容の密度を高める。

### 4.4. 日本語の読み書きにも辞書を使用せよ

2.10.で扱った〈ことばの誤用〉は, 〈プロ〉が書く新聞・雑誌などでも近年散見される。週刊ポスト2010年11月19日号の「ほんとうにやりたい仕事」という記事に「プラモデル製造者」(p.17)が挙げられている。これは「多くの客から注文を受け, 人よりもよりリアルなプラモデルを作り上げる仕事」(p.17)だそうである。

しかし〈製造〉とは, 「原材料や粗製品を, 加工したり組み立てたりして, 製品を(大量に)作ること」(新明解国語辞典)である。すなわちこれは, 〈自動車や家電製品の製造〉といった場合に用いられることばである。したがって「プラモデル製造者」は〈プラモデルメーカー〉である。

これに対して, プラモデル製造者によって生産されたプラモデルを組み立てて, 一種の工芸作品に仕立てることを表すのにふさわしいことばとしては〈制作〉が挙げられる。新明解国語辞典は〈制作〉を「絵画・彫刻などの芸術作品

を個人が、映画・演劇・放送番組などを何人かが協力して作り上げること」としている。したがって記事にあるような仕事に従事する人は〈プラモデル制作者〉<sup>註)</sup>とすべきである。

辞書が必要なのは外国語学習の場合だけではない。5.で述べるように、〈母語〉と〈外国語〉は連続しており、その差は相対的ではない。外国語の読み書きに辞書が必要であるように、日本語の読み書きにも国語辞典をはじめとする辞書が不可欠である。とりわけ〈～に鑑みて〉のように、ふだん耳慣れない／使い慣れない、あるいは〈製造〉と〈制作〉、〈製作〉のような紛らわしいことばなどを使用する場合はまさに外国語と同じである。少しでも気になるときは必ず辞書で調べる心がけが必要である。

筆者はこれまで〈授業で学生に資料を配布した〉という表記を何の疑問も抱かずに使用してきた。しかし本稿作成に関連する文書のやりとりの中で、正しくは〈配付〉である旨の指摘をある人から受けた。落とし穴はわが身の周りにも潜んでいることをあらためて実感した。もって銘ずべしである。両者の相違については各自調べられたい。

註：表記については〈制作者〉と〈製作者〉の間で揺れがみられる。しかし新明解国語辞典は〈製作〉を「〔道具・機械など型にはまった物を〕(大量に)作ること」としていることを考慮し、ここでは〈制作者〉とする。

#### 4. 5. 提出前に読み直しせよ

レポートを読んでいると、一度も読み直すことなく、書いてそのまま提出したのではないかという印象を受けるものが散見される。そうでなければ、単純な誤記やごく初歩的な文のねじれなどがこれほどあるとは思えない。こうしたレポートからは、その出来・不出来以前に、ぞんざいなやつつけ仕事の印象

を受け、不快感を感じる。読み直しもせずに提出するのは不届き千万である。書き終わったら必ず読み直し、気付いたところを直す。そのうえで少なくとも一晩程度は時間をおいてもう一度読み直す。これだけでもかなり良くなるはずである。そのうえで友人などに読んでもらえれば理想的である。

和菓子の良質の餡は長い時間をかけて練り上げる。これによって滑らかに仕上がる。文章も同じである。メールにすぐ返答が求められる気ぜわしい現代であればこそ、大学のレポートくらいよく練ってほしい。モノとしてのレポートは消えても、練った経験と技は自分に残る。今は諸君は自分自身を育てる時期である。卒業して仕事につけば、自分のことにかまけていられる時間はなくなる。適切な文章を手早く書かなければならない機会も増える。急がば回れである。優れた文学作品を書くには天分が必要である。努力でどうにかなる世界ではない。しかしレポートのような実用文は、ある程度の努力と経験によってなんとかなるものである。

大学のレポートでおかしな日本語を書いても成績評価が下がるか、再履修となるだけで済む。しかし社会人の場合、これは同僚や顧客、取引先などからの信用にかかわる大きな問題であり、自らの評価を失墜させることになる。十分に注意してほしい。

## 5. おわりに

言語学や言語教育の場で、近年は〈母語・外国語〉に代わって、〈第一言語・第二言語〉といった表現が用いられることが多い。これは一つには、二言語、三言語使用といった環境に育ち、どれが母語とも特定できない場合などに配慮してのことである。しかしここで同時に重要なのは、〈母語〉に絶対的かつ特権的な地位を与えるのではなく、〈後から学んだ外国語との違いは相対的なものである〉とする考え方である。これにならえば、われわれの多くにとって日

本語は、自分ができるいくつかの言語の中で〈運用能力が一番高い言語〉ということである。その理由は、〈血〉や〈国籍〉の問題ではなく、単に日本語の習得に最も多くの時間と労力を費やしたからにほかならない。このことは、〈母語〉である日本語といえども、上達するためには学習が必要であることを物語っている。

とりわけ日常会話とは一線を画す書きことばに習熟するためには、外国語の場合と同様の意識的な勉強が不可欠である。そして第一言語の運用能力向上に向けての意識的な努力とその成果は、〈外国語〉の勉強や運用能力にも大きくプラスに作用する。なぜならば、第一言語と第二、第三言語などはことばをいかに使用するかという点で根本においてつながっており、その相違は相対的ではないからである。

最近日本のいくつかの有名企業で社内の言語を英語にする動きがみられる。社内や外国に対してはそれでよいのかもしれない。しかし一般の日本の顧客や取引先などに対する広報や連絡、サービスなどに使用されるのは今後も日本語である。これらの企業は、かつて英語の通訳や翻訳者を雇ったように、今度は日本語の専門家を特別に雇うつもりなのであろうか。

学校ランキングや偏差値に象徴される相対的な順位は日本国内で、それも特定の約束事の下でのみ通用するものである。これに対して、グローバル化を背景として、諸君のこれからの長い人生で求められるのは、絶対的な学力であり、実力である。上に述べたように、日本人だから自動的に日本語ができるというものではない。そしてさらに、〈ヘンな日本語〉の氾濫に見られるように、多くの日本人の日本語運用能力は急速に低下している。これらのことを考え併せるならば、日本語という一つの言語が適切に話せる／書けることは、〈外国語〉ができることと並ぶ立派な特技であり、実力である。今後その価値がさらに高まることは確かである。

実名は掲げられていないとはいえ、自分の書いたものが〈不適切〉として公表されるのは決してうれしいことではない。しかし、具体的・実戦的な文章作成指導という事柄の性質上、事例が不可欠である。趣旨を諒解されたい。

第一次世界大戦の記録映像で、敵の敷設した鉄条網の前に何人かの兵が身を挺してうずくまり、友軍将兵がこれを〈踏み台〉として次々に躍進突撃してゆく場面を見た記憶がある。学生諸君もまた、〈戦友〉の痛みを無駄にすることなく、適切な日本語の習得に向けて、精進を続けることを期待する。

## 6. 参考文献

以下に挙げるのは、レポートの作成に際して、参照ないしは利用を薦める書籍・辞書などの一例である。

- 1) 石原千秋. (2006). 大学生の論文執筆法. ちくま新書.

前半部では主に大学での勉学とレポート執筆にあたっての心構えや具体的方法などが説かれている。後半部では、著者が論文にとって「たった一つの方法」(p. 129) であるとする「線を引くこと」(p. 130), すなわち見解や意見の差異化の実際が、近年の良書からの文章を使って例示されている。後半部は良き〈大学生用現代国語の教科書〉ともいうべき趣である。

- 2) 小笠原喜康. (2002). 大学生のためのレポート・論文術. 講談社現代新書.

レポートを書くにあたって必要なことが、文体やことば遣いも含めて、網羅されている。特に文献・資料の探し方、コンピュータの利用などに詳しい。頁のレイアウト例などもあり、見やすく分かりやすい。

- 3) 加藤周一. 夕陽妄語 悲しいカタカナ語. 2006年4月19日. 朝日新聞・夕刊. 2版, p. 10.

著者は、カタカナ語が「現実には自国民相互のコミュニケーションの障害、そしてもちろん感性の質の低下」を招いていることを指摘している。

- 4) 野口恵子. (2009). バカ丁寧化する日本語 敬語コミュニケーションの行方. 光文社新書.

本書の出発点は、ことばの〈バカ丁寧化〉に象徴される現代日本人の敬語使用の問題点である。しかし著者が一貫して問題とするのは〈敬意とは何か〉, 〈コミュニケーションとは何か〉である。敬語の使い方以前の本質的な問題が指摘されている。

- 5) 藤沢晃治. (1999). 『分かりやすい表現』の技術. 講談社ブルーバックス.  
 藤沢晃治. (2002). 『分かりやすい説明』の技術. 講談社ブルーバックス.  
 藤沢晃治. (2004). 『分かりやすい文章』の技術. 講談社ブルーバックス.

いずれにおいても、世の中に溢れている〈分かりにくい表現・説明・文章〉などを素材に、人間の認知の仕組みに合った表現や説明、文章作成の方法が具体的に提示されている。

- 6) 松川正毅. (2010). ディッセルタシオンの技法 (1) —フランス流文章構成. 書齋の窓. No. 595. 2010.6. 有斐閣. 2-7.  
 松川正毅. (2010). ディッセルタシオンの技法 (2・完) —フランス流文章構成. 書齋の窓. No. 596. 2010.7・8. 有斐閣. 2-7.

著者がフランスで受けた文章構成法の紹介である。しかし次の点などをはじめとして、日本語によるレポート作成の参考としても有用である。

- ①「文章を作るということは、構成することを意味している」(No. 595, p. 3)  
 ②「『とても』や『非常に』『極めて』のたぐいの強調表現をでき得る限り避ける」(No. 595, p. 6)  
 ③「接続詞もでき得るかぎり、使わないで論を進めていく」(No. 595, p. 6)

また文章作成は単なる技法の問題ではなく、教養や見識などと不可分であるとの指摘ももつともである。

- 7) 山内志朗. (2001). ぎりぎり合格への論文マニュアル. (平凡社新書).

論文の基本的作法，特に各種記号の使い分け，引用のしかたや文献表の作り方などについて詳しく述べられている。皮肉とウィットにも富んでおり，読みものとしてもおもしろい。

#### 8) 国語辞典

辞書類では，少なくとも国語辞典だけは手許に置いて使用する。

#### 9) 用字用語辞典

漢字の選択や送りがななど表記について調べる際に便利である。

#### 10) 類語辞典

言い換え，表現の多様化などのために重宝する。一例として，筆者は下記を使用している。

柴田武・山田進編。(2002). 類語大辞典. 講談社.

#### 11) 中村明 (2010). 日本語 語感の辞典. 岩波書店.

似たようなことばの微妙なニュアンスの違いについて詳しく説明されている。いくつかの候補から最適な語・表現を選ぶ際に有用である。

## 7. 引用文献

- 1) 石原千秋。(2006). 大学生の論文執筆法. ちくま新書.
- 2) 小笠原喜康。(2002). 大学生のためのレポート・論文術. 講談社現代新書.
- 3) 学習技術研究会／編著。(2002). 大学生からのスタディ・スキルズ 知へのステップ. くろしお出版.
- 4) 新明解国語辞典 第四版。(1992). 三省堂.
- 5) 千早正隆。(1982). 日本海軍の戦略発想. プレジデント社.
- 6) 野口恵子。(2009). バカ丁寧化する日本語 敬語コミュニケーションの行方. 光文社新書.
- 7) 米澤泉。(2008). コスメの時代 「私遊び」の現代文化論. 勁草書房.